

素材の分析による創造

成田暢

キラキラと耀く長方形の箱は、青から緑を主として、所々に赤や黄が覗く。そうした色や反射の調子を揃えて描き出された縞模様は、ところどころ段違いになり、耀きに緩急が生まれ躍動的である。さて、その縞模様をよく見れば、箱の形体に合わせて大きさを調節しながら六八mm角に整えられた小片の集合体である。小片は貝殻の真珠層を切り出したもので、年輪状の模様を再現するように並べられている。貝殻に残る生命力が、箱という人工的な形に収められているかのようである。本作《耀貝螺鈿飾箱》は、黒田辰秋が繰り返し手がけた「メキシコ鮑貝」の螺鈿作品を代表するものであり、黒田が引き出したこの貝の輝きを版画家・棟方志功は「耀貝」と名付けた。

黒田辰秋は、一九〇四(明治三十七)年、京都の塗師屋に生まれた。小学生時代、動物園へ行く途中にあった平瀬貝類博物館で、初めてメキシコ鮑貝の貝殻を目にし、以来、動物園への行き帰りに貝殻を眺めることを楽しみにしたのだという。しばらく蒔絵の修行をした後に、家業を手伝いながら独学で漆芸に励んでいた時、友人のマンドリンに施されたメキシコ鮑貝の螺鈿を目にし、素材として求めるようになる。

十九歳頃、黒田は大阪の摺貝屋でメキシコ鮑貝を手に入れるも、すぐには使用せず、「三十歳まで貝殻のまま眺め暮した。そして本格的に用いたのは、一九三五(昭和十)年、三十一歳の黒田が大阪「中村屋」で開催した個展に出品された小箱とされる。「ようやく作家としての自己を見出し



黒田辰秋《耀貝螺鈿飾箱》1974年
東京国立近代美術館蔵

たこの展覧会において、初めて思い入れ深いメキシコ鮑貝に向き合い、構想を実現させたのである。

「螺鈿」は、貝殻内面の真珠層まで研磨した板状の材を様々な形に加工し、漆器などの表面を装飾する技法で、主な素材としては、夜光貝・鮑貝・白蝶貝などである。板材の厚みによって呼称が変わり、特に一・三mm以上を「厚貝」、〇・〇六〜〇・〇八mm程度を「薄貝」と分類する。厚貝は、板材の加工が難しく、簡潔な形にならざるを得ない。それがかえって力強く大胆な表現となる。一方、薄貝は扱いやすく、複雑な形を用いた、細やかで優雅な表現に向く。かつて大陸から日本に渡ってきたこの技法は、平安時代以降、日本的意匠の中に溶け込み、近世の蒔絵装飾の需要の高まりにともなって、厚貝による雄大な表現から、薄貝を用いたより精緻な表現へと展開した。

黒田が螺鈿において目指したのは、鎌倉以前の力強い表現であり、大陸や朝鮮半島、日本の古典に学びながら、自己の表現を追求していった。初期には単純化された植物モチーフを描出しており、一九三〇年代末から四〇年代初頭の菖蒲や梅文をあしらった作例では、植物の姿は実に伸びやかである。器物全体を螺鈿で覆う試みもこれとほぼ並行したが、最初の頃は貝殻の切り出しが画的ではなく、不定形の小片が器体に複雑に嵌め込まれている。それが正方形や長方形あるいは台形などに整える傾向を示すようになるのは、戦後一九五〇年頃からのことだ。

今一度《耀貝螺鈿飾箱》の細部に目を向けよう。ここでは文様を構成する厚貝の小片が四角形や三角形の一定の形体におさめられ、しかも整然と並べられている。おそらくこの作品において黒田は、貝の生命力の象徴とでもみなすべき輝きを最大限に引き出しながら、光の反射率や質感などを分析し、自らの思う形へと再構成することに創意を尽くしたのであろう。蓋の角を面取りしただけの直方体は、形よりもむしろ鑑賞者の視線を素材へと促しているようだ。研磨されずに残された真珠層の凹凸は、野趣味に富みながら、目に入る光と色の量を調節する効果を持ち、表面の縞模様もまた、貝殻の持つ幅広い色調を精査して見せている。

黒田がメキシコ鮑貝を手にしてから費やした十年余の歳月は、自身が素材に看取した美を分析し、自己の造形言語、つまり器物という形体と螺鈿という装飾法において論理的に置き換えるための時間だったといえよう。そして、それは制作行為によって「見ているだけで、楽しいもの」だったメキシコ鮑貝という自然への黒田の挑戦だったのではないだろうか。

(工芸課客員研究員)